

**新連載「実践に学ぶ」「発達保障のために学びたい本」で、
職場や地域の中での学習活動を！**

そのために、新しくなった『障害者問題研究』の
定期購読を拡めてください

本誌編集委員長 白石 正久

「理論と実践の統一」をめざして

『障害者問題研究』は、全国障害者問題研究会（全障研）が発行する研究誌として、1973年に創刊されました。全障研は、その規約において「障害者の権利を守り、発達を保障するために、理論と実践を統一的にとらえた自主的・民主的研究運動を発展させることを目的とする」としています。本誌も、「理論と実践の統一」をめざして、障害のある人々のための教育、保育・療育、社会福祉、医療の実践（社会変革的实践としての運動を含む）の報告を、特集テーマにそってとりあげてきました。ともすると実践が理論に従属し、あるいは逆に理論を軽視して実践に偏重する傾向が生まれがちですが、本誌は、実践を通じて理論を検証し、その理論に導かれて実践も発展していくという「理論と実践の統一」を大切にしてきたのです。

新しい連載企画「実践に学ぶ」

発達保障の実践が、若い世代に引き継がれつつある今、本誌は、あらためて実践研究の意義、実践を記録・分析・記述する方法、研究をすすめるための集団のあり方などについて、若い世代とともに学びあうことのできる連載「実践に学ぶ」をスタートしました。その学びあいのヒントを提供するために、研究者によるコメントを付しています。実践報告は、全障研全国大会の分科会などで行われているように、集団的な討議を経て深められます。ここで紹介する実践報告は、手本というよりも、集団で検討されることを通じて、実践を前に進めるための多様な手がかりを提供してくれるテキストとなることでしょう。

もう一つの新連載「発達保障のために学びたい本」

ここでは、発達保障の思想や実践・研究の草創期において多くの人々に愛読され、その人々の実践や運動を通じて生命力を発揮してきた著作について、その内容を紹介し、学習の手引きとなるような解説を試みます。障害のある人々が、教育権すら保障されず、労働の場もなかったとき、困難に立ち向かうために形成された思想と理論、手をつなぎあい生きる姿勢を、時代背景への想像力を逞しくしつつ学んでいきたいと思ひます。

（しらいしまさひさ）